

川口喬一、岡本靖正編『最新 文学批評用語』（1998）研究社、2013.

- ・アナール学派 (the Annales school) …1929年フランスのマルク・ブロックとリュシアン・フェーヴルが創設した雑誌『アナール（年報）』を中心とした歴史学者の集団。生態系や環境変動、人間社会の日常生活の隅々の正確なデータを集める出発点とし、政治・経済における大事件や階級闘争、英雄の活躍などに偏りがちな従来の歴史記述に大きな反省を生み出した。
- ・アブジェクション (abjection) …棄却。J・クリステヴァが『恐怖の権力』（1980）において定義した概念。アブジェクトなものを棄却する行為であり、アブジェクトなものとは主体が主体であるために棄却しなければならないもの。例えば母は、前オイディップス的世界から父の方が統括する象徴界へ至る家庭に棄却されるものであり、アブジェクトなものとはしばしばおぞましくも魅惑的である、糞便、嘔吐物、死体などが挙げられる。それはまた「同一性、体系、秩序をかく乱するもの」であり、文化の秩序から排除され、アブジェクションとは、主体の構造だけでなく、文化における配乗の構造においても作動する。
- ・意図された読者 (intended reader) …作者が明確に意識していた実在の読者、あるいは虚構の読者であり、前者については作品外の資料から判明する特定の個人や集団であり、後者については作品内の要素から判断できる一定の読者になる。
- ・イメージ (image) …もとはラテン語「模写像」を意味する。文学用語としては既に16世紀から使用されていたが、18世紀以降詩的言語が喚起する視覚的映像を指す。のちに視覚のみならず想像力の中で五感で把握されるすべての心象を表す「イメージ」という考え方が登場する。
- ・引用 (quotation, citation) …他の有名な作家のテクストの一部を意識的に囲繞すること。古典的修辞学では、引用は自説の具体的な例証ないし補強のための重要な方法として積極的に奨励され、例えばギリシアのロンギノス『崇高について』はそれ自体豊富な囲繞からなるだけでなく、引用についてのメタ言説でもある。今では新しいテクストは何らかの意味ですべて他の無数のテクストの引用からなる、「引用の織物」とする考え方が主流であり、フローベール『ブヴァールとペキシュ』（1881）、ジョイス

の『ユリシーズ』(1922)『フィネガンズ・ウェイク』(1939)などはその代表例。

・オーラ (aura) …アウラ。あるモノから発散される雰囲気など。W・ベンヤミンは、芸術作品にまつわる神秘性、あるいは感覚対象を取り巻く非意志的記憶に溶け込む連想群を、この語で説明した。「複製技術時代の芸術作品」(1935)において、機械的な複製は、アウラの要素が非意志的記憶に入って作品を豊かにするプロセスに介入し、アウラを取り去ってしまったと指摘する。